［実践報告］

「ことわざ」を活用した国際理解の授業の展開

新田時也*

Abstract

This essay introduces the flow of the “International Understanding” class conducted by the author in the academic year 2023. The aim is to make students aware of the differences between Japanese and foreign cultures and societies, and to ask them to think about how we can build friendly relationships with each other. As a means to this end, we asked the students to compare Japanese and foreign proverbs. This is because proverbs contain the wisdom of our ancestors. Students were divided into groups and asked to compare the differences between Japanese and foreign proverbs in such genres as “food,” “animals,” and “daily life. By asking students to think about why these differences emerged in terms of lifestyle, climate, society, and history, we made them aware of the differences between Japanese and foreign ways of thinking. Finally, each group was asked to summarize how the differences in thinking could be overcome in the private sector and what methods could be used to establish friendly exchanges. The methods of friendship that the students came up with on their own were diverse and often interesting. The author believes that proverbs will continue to be an effective tool for teaching international understanding in the future, as they are familiar and tasteful, expressing life lessons and the characteristics of human society in short phrases.

1　はじめに ――本小論の「ねらい」

「地球上には70億人を超える人々が、様々な言語・文化・社会のもとに生活している。近年の情報技術や交通輸送技術などの発展は、遠く離れた地域と人々が緊密に触れ合う時代をもたらした。様々な背景と価値観を持つ人々が混在する『グローバル社会』において平和で公正な世界を構築していくために、私たちはどのように考え、行動していけばよいのであろうか。今まで当然と思ってきた自分の思考の枠を取り払い、国際社会の現実を客観的に理解するとともに、グローバル社会における自分自身のアイデンティティを認識し、多様な他者とともに生き

＊　東海大学教育開発研究センター

る力を得ることを目指したい。」（2023年度 シラバス（要旨・概要）「国際理解」）

本小論は、上記の目的を達成する足掛かりとして、著者が授業「国際理解」で展開している方法についての実績報告である。対象は、東海大学湘南キャンパスにおける2023年度秋セメスターでの当該授業とする。

2　授業の展開

（1）「ねらい」と流れ

日本と海外の考え方の違いについて、両者の「ことわざ」を比較することで学生に発見をさせ、なぜ、そのような違いが生まれたのか、違いを乗り越えて友好な交流を深めるには、どのような方法があるのかを学生自らに考えさせる。

ガイダンス（第１回）では、本授業の「ねらい」を説明し、学生を数名のグループに編成する。以降、各グループで調べてきた日本と海外の「ことわざ」について、「食べ物」、「動物」、「生活」などのジャンルで分類し、各ジャンルの中で、日本と海外の「ことわざ」について、違いなどを比較する（第２回）。なぜ、このような違いが生まれたのか、生活や風土、社会、歴史などの観点から学生に考えさせることで、日本と海外の考え方の違いについて認識させる（第３回）。日本と海外の考え方の違いが「ことわざ」を通して認識された上で、それでは、互いの考え方の違いを、どのようにしたら民間の立場で乗り越えることができるのか、友好な交流を結ぶには、どのような方法があるのかについて、各グループでまとめさせる（第４回）。ここまでの話し合いを、一枚の模造紙にまとめさせる（第５回）。発表会を開催し（第６回）、以上を振り返って、民間として、海外と友好な交流を結ぶにはどのような方法があるのかを、個人的にレポートにまとめさせる（第７回）。

（2）グループワークを円滑に進める技法

グループに、リーダーとサブリーダーを置いて、責任者を決めることで、学生の自主性に任せた。教員は、リーダーからの質問や相談には応えるが、全体へのアナウンスは極力、行わない。

（3）グループワークにおける学生の行動

教員から任せられているという自負心がプラスとなって、グループ内でのリーダーとサブリーダーをコアとした運営はスムーズであった。

（4）「ことわざ」をテーマに選択した理由

「ことわざ」は、人生の教訓や人間の社会の特性が短い「ことば」で表されており、身近な味わい深いものである。例えば、日本と海外の「ことわざ」の中に出てくる「食べ物」を比較すると、日本では、「ぼたもち」や「コメ（米）」が登場するが、海外では、「ミルク」や「ソーセージ」が登場する。「ことわざ」に出てくる「食べ物」が、なぜ、日本と海外とでは異な

るのか、「食文化」の違いは、なぜ、生まれたのかなど、「ことわざ」を通して問題発見につながりやすいためである。

このように、本授業では、日本と海外の「ことわざ」を比較することで、互いの文化や社会の違いを学生に認識させた上で、どのようにしたら互いに友好な関係が築けるのであろうかと言うことを、アイデアとしてまとめさせた。次節では、各グループが発表した成果物の一部を写真で紹介する。

3　成果

以下は、日本と海外の「ことわざ」を比較して、互いの文化や社会の違いを知ることで、民間が中心となり、どうすれば友好な国際協力を築くことができるのかについて、学生自らが考えたアイデアである。

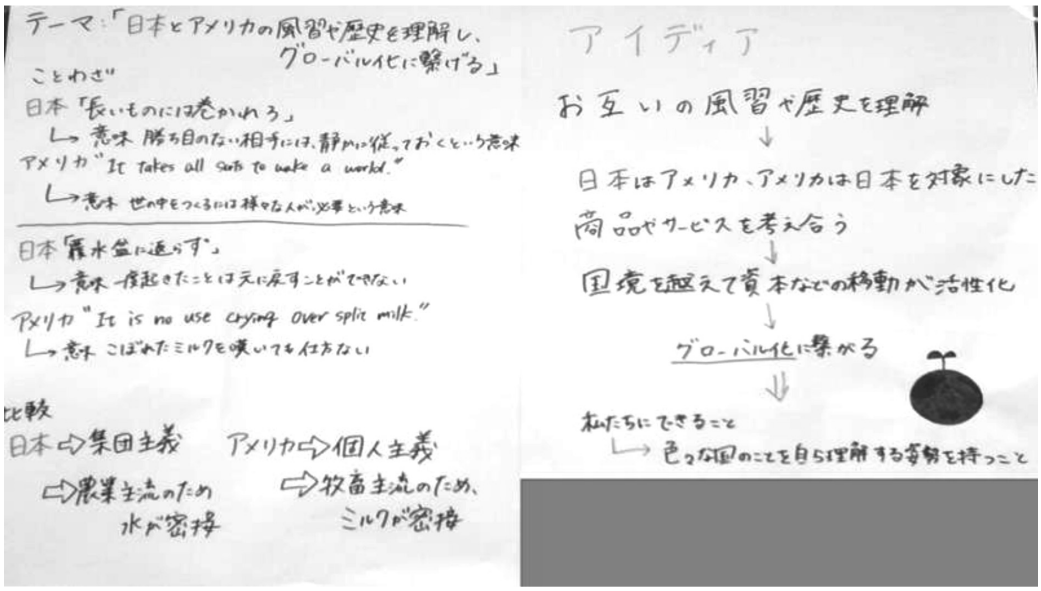

図1　発表のまとめ「日本とアメリカの風習や歴史を理解し、グローバル化に繋げる」

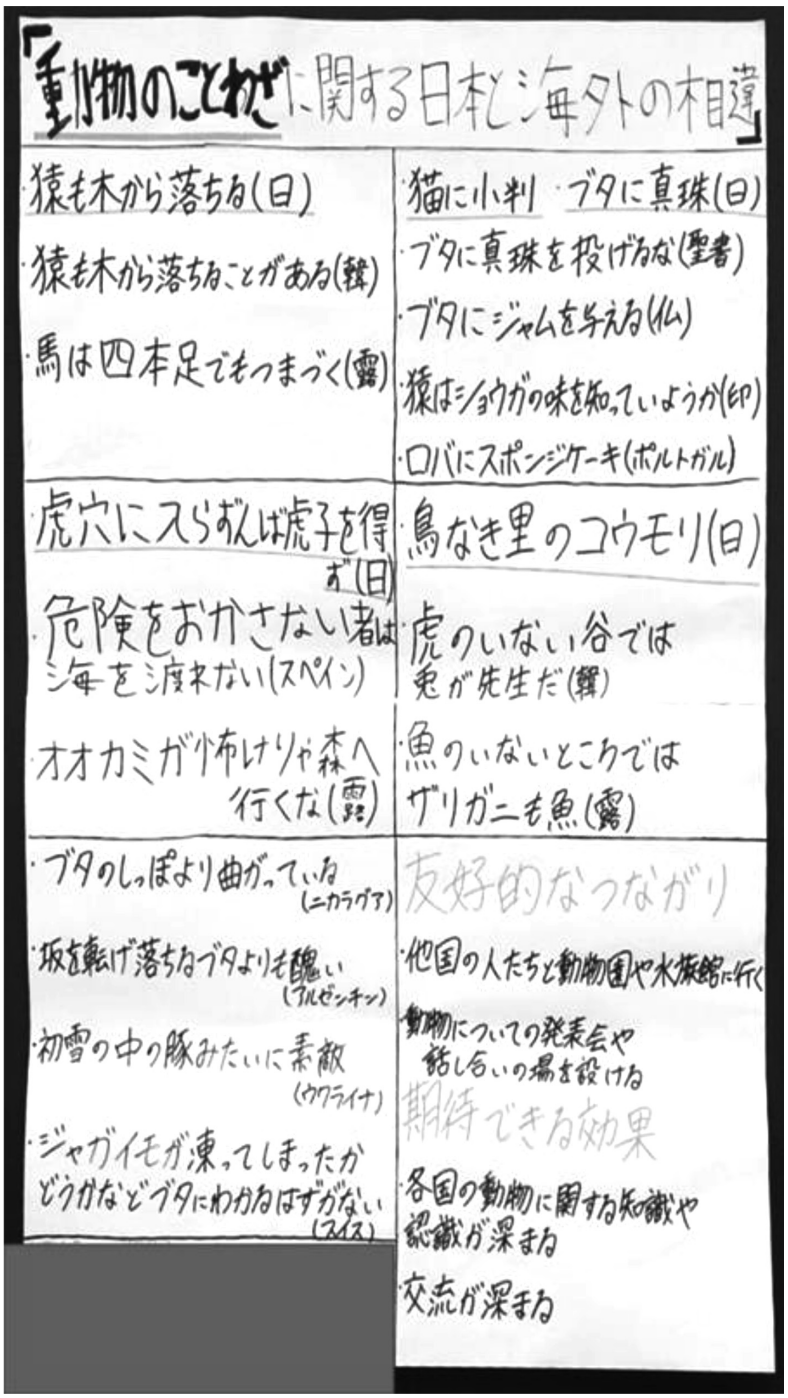

図２　発表のまとめ「動物のことわざに関する日本と海外の相違」

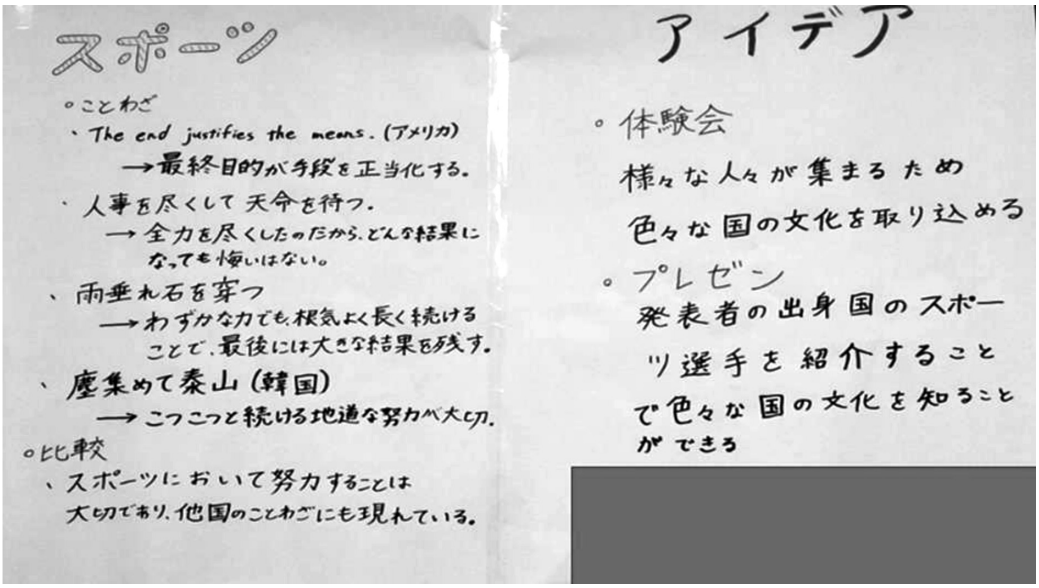

図３　発表のまとめ「スポーツ」

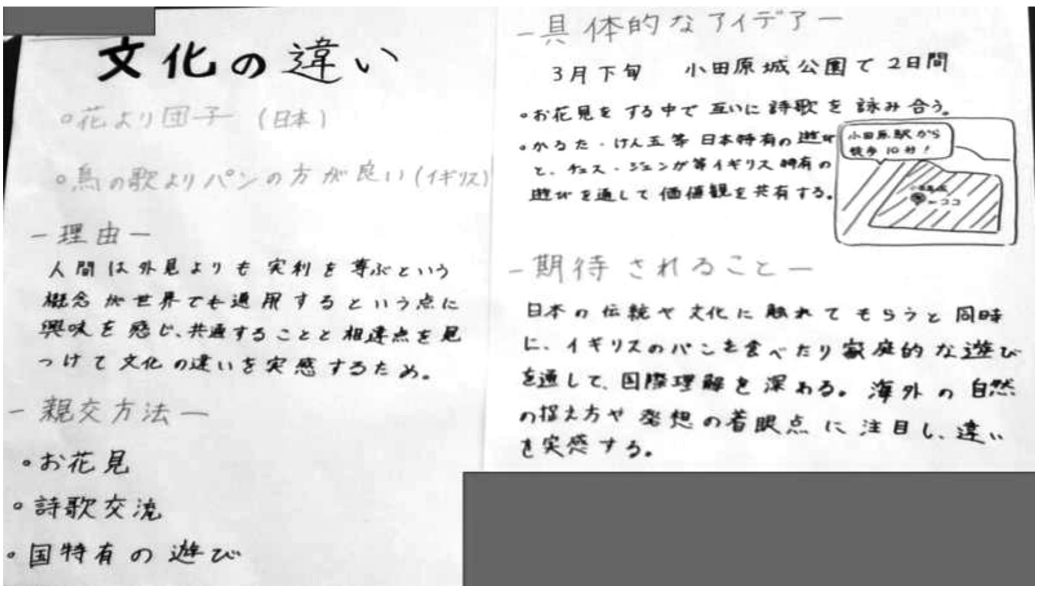

図４　発表のまとめ「文化の違い」

以上は、日本と海外の「ことわざ」を比較して、互いの文化や社会の違いを知ることで、民間が中心となり、どうすれば友好な国際協力を築くことができるのかについて、学生自らが考えたアイデアである。上記は一部であるが、学生には、原則、①「テーマ」、②「比較した日本と海外の『ことわざ』」、③「比較して分かったこと」、④「互いの考え方の違いを越えて友好関係を築くためのアイデア」、⑤「友好関係を築くことで得られる期待や効果」の５つの項順にまとめさせた。①「テーマ」は、全体の構図を簡潔な文言で紹介したもの、②「比較した日本と海外の『ことわざ』」は、アイデアをまとめるにあたり、主として利用した日本と海外の「ことわざ」について、その内容、分かる範囲内での「ことわざ」の成立の背景など。③「比較して分かったこと」は、②で選んだ「ことわざ」を比較することで、日本と海外の考え方の相違、歴史や文化的な背景など、④「互いの考え方の違いを越えて友好関係を築くためのアイデア」は、③で互いの考え方の相違や歴史・文化的な背景の違いに気づく中で、それでは、違いの垣根を越えて、民間として互いに友好な関係を構築するには、どのような手段が考えられるのかについて、まとめさせた。最後に、⑤「友好関係を築くことで得られる期待や効果」では、④で友好を構築するアイデアが実現できた場合に、どのような国際交流、国際関係が互いに期待され、友好の効果はどのようなものと考えられるのかについて、まとめさせた。

４　おわりに ――考察

（１）本授業で得られた教育的な効果

一番の教育的な効果は、学生が自主的に問題点を発見し、それを解決するためにグループ内で活発な話し合いを行ったということである。著者としては、日本と海外の「ことわざ」の比較のみで、現実の国際問題が容易く解決できるとは思えないし、学生自身も承知はしていることではあるけれども、しかしながら、留学生も交わって、真剣に問題解決のための話し合いを行い、グループの考えとしてまとめることができたということは、とても意義あることであると考えている。

（２）今後の問題点

本授業では、「ことわざ」を題材として、民間同士での友好交流の仕方を学生に考えさせたけれども、題材は、とくに「ことわざ」に限らず、「音楽」でも「絵画」でも「スポーツ」でも相当すると思われる。「国際交流のアイデア」＝「ことわざ」だけではないことは、ガイダンス時に、学生にも伝えている。多彩な教員の得意分野で、国際理解の授業が展開できればと考えている。